

【巻頭言】

新型コロナウイルス感染症禍と ICT 活用

今野 洋子  
北翔大学

2021 年は東日本大震災から 10 年目を迎えることから、東京オリンピック・パラリンピックは東北の再生・創生の象徴として、希望に満ちた大会となるはずであった。

しかし、2020 年、世界的に「新型コロナウイルス感染症拡大」という極めて稀で大きな災禍に見舞われた。新型コロナウイルス感染症のような感染症との戦いは人類史上初めてではない。これまでも多くの感染症の蔓延があり、多くの犠牲を払いながら人類は生存を継続してきた。現在も高度化した最先端の医療技術により、災禍を最小化する努力は世界中で不断に実践されている。しかしながら、感染拡大は世界経済にも大きな影響を及ぼし、日本における社会経済活動も大きな変化を余儀なくされた。東京オリンピック・パラリンピックはコロナ禍からの復活の査証としても開催されるはずであったが、さらなる感染拡大を招いた東京オリンピック・パラリンピックの開催は、希望に満ちた大会とは全く異なるものとなった。

第六波の現在、この非常事態における情報通信技術（ICT）の果たす役割、求められる技術について改めて考えさせられることが多くなった。この新たな感染症の蔓延に対して、インターネットやスマートフォンに代表される ICT がどのように効果的な役割を果たせるだろう。

テレワーク、学校での遠隔授業、医療における遠隔診断、ビッグデータ解析による人流の可視化などが話題となっているが、その普及度や効果は十分ではない。GIGA スクール構想に伴い、端末の学校・児童生徒への配布等が前倒しされて急がれたが、突然の利用促進策では活用について一般化されないのが現実である。

これからは、ICT を利用したり使いこなしたりできる人とそうでない人の間に生じる格差（貧富や機会・社会的地位などの格差）の解消が必要である。養護教諭として、子供の生きる未来を見つめ、子供に不利益が生じないよう支援する責務がある。

末筆になるが、本稿が手元に届く時期には、新型コロナウイルス感染症による災禍が回復に向かい、明るい出口が見えていることを切望している。